

フィールドからの証言 31

八王子市 裏高尾 日影沢林道における

陸生ホタル幼虫の寒中の調査

浅賀敏夫・小俣軍平（文責）

1：はじめに

今年は、板当沢ホタル調査団から陸生ホタル研に転向して早くも17年になりました。その間、陸生ホタル幼虫の寒中の生態について、フィールドでの生態調査をしたことがありませんでした。そこで、今年は久しぶりで挑戦してみました。こうした調査に最適な板当沢林道は、2019年の台風19号による被災以後、まだ完全に復旧していませんので今回は断念し、調査地には高尾山の北面に当たる日影沢林道を選んでみました。

日影沢林道の位置（赤線）と調査地（黄色円）



日影沢林道は、先に月報136号で報告した裏高尾の林道の中の一つで、全長約2km、地質も動植物相も他の林道とほぼ同じです。ところが不思議なことに、同じ高尾山の北斜面にある林道でも、昨年の酷暑による倒木・山側法面岩盤の風化・崩落などの大きな影響を全く受けなかった林道です。以下その報告です。

1：図

高尾山の日影沢にある登山者が普通に歩く登山道からこの林道に入って間もなくの所です。手前に落枝が1本ありますが、山側法面には変わった様子は見られません。



2：図

林道の入口から約 200m 進んだ地点
藤弦が1本垂れているだけです。山側の法面も、変化はなく、落ち葉が降り積もっています。



3：図

奥の山側の岩磐は安定した状態です。
風化し崩れた形跡は見られません。





4：図

3：図の法面の状況。

シダが生えて落ち葉が積もり、陸生ホタルの幼虫には最適な環境です。

5：図

山側奥の樹木（黄色矢印）は、酷暑で倒れてしまった樹木の典型的な姿で、他の林道では多数見られますが、ここ日影沢林道では稀です。また林道全体にも変わった様子はありません。



6：図

黄色の矢印の箇所は、岩盤の崩落のように見えますが、落ち葉溜まりです。

7：図

基点から約 1.5 kmの地点。
沢は無いですが湧き水が有り、林道を越えて流れ出しています。スジグロボタルがいるかもしれません。



8：図 林道入口から約
1.8km の地点
奥に見える伐採された樹木は
かなり古く、昨年のもものでは
ありません。



9：図 林道の入口から約 1.9km の地点
林道の終点近くです。手前から奥にかけて
の山側の斜面は、陸生ホタル幼虫の格好
の生息場所です。



以上ご紹介したような環境の日影沢林道で、陸生ホタル幼虫の調査を 2 回実施しました。

調査地は林道の西端（終点）、冒頭1ページの地図の黄色円の所です。

2 調査結果

- ・ 調査日時 2025年1月22日（1回目）午後1時～3時
2025年1月28日（2回目）午後1時～3時
- ・ 調査者 浅賀敏夫・小俣軍平（1回目・2名）、小俣軍平（2回目・1名）
- ・ 調査対象 冬季休眠中の陸生ホタル幼虫
- ・ 気象条件 1月22日 晴れ、気温7°C、地温、5°C、湿度69%
- ・ 1月28日 晴れ、気温6.5度、地温5°C、湿度70%

1：図 調査地の状況



2：図 調査中の浅賀氏



調査方法

以下 3：図・4：図のような道端の斜面で、積もった落ち葉を軍手でそっと掃いて取り除き、現れた地面をルーペを使って丁寧に観察しました。

つづいて割箸を使用し、5：図・6：図のように地面を 3～4 c m 浅く掘って、幼虫がいるかどうか調査しました。

3：図



4：図



5：図



6：図



調査面積は、二人合わせて約8㎡。

みつかった生物(同定 石垣博史)

① ヒル 種不明



② コメツキ



③ オナジマイマイ



④ ヤケヤスデ



⑤ コバエの幼虫



⑥ コベソマイマイ



⑦ チャバネアオカメムシ



⑧ ニホンヒメフナムシ



⑨ ツリミミズ



3 結果の考察

前回に報告したように、裏高尾の林道において、陸生ホタルの生態に深刻な影響を及ぼしたのは、昨年夏の酷暑による林道の山側法面に起きた岩盤の崩落でした。

1：図（前回の報告より；今回の日影沢林道とは別の林道）



陸生ホタルの日常的な生活場所を、土砂が直撃して覆いつくしています。これでは事前に避難することは難しく、生息していたホタルは死滅したのではないかと考えられました。一方、今回調査した日影沢林道では、ご覧いただいたように、こうした崩落は全く起きていませんでした。ですから、寒中であっても、昨年11月に冬季の休眠に入った陸生ホタルの幼虫は、落ち葉の下の浅い地面に静止しているだろうと予想して調査に入りましたが、期待に反して、幼虫は全く姿を見せませんでした。

また驚いたのは、陸生の貝類は生貝が一匹だけで、貝殻が一つも出てこなかったことです。過去の調査では、高尾山の林道には数の多少はありますが、10種ほどの陸貝類の記録があります。その中でも、ミスジマイマイ・チャイロヒダリマキマイマイは殻の大きさが3cm以上もありますので、死後しばらくしても、貝殻が道端に転がっています。これより少し小型のオオケマイマイでも殻が2cmほどありますので、貝殻だけとなっても、道端に残っています。ところが今回、これら3種の貝殻は全く見つかりませんでした。またこれ以外に数種生息しているはずの小型のマイマイも、生貝ばかりか貝殻も見つかりませんでした。

多摩丘陵では5、6年前から陸生の貝類が激減しており、原因がわかっていませんので、大変気になってはいました。しかし、ここ高尾山の林道は、多摩丘陵の自然環境とかなり異なりますので、まさか同じ状況が起きているとは思いませんでした。

現在は冬ですから、この状態で4月の下旬以降休眠から覚めた陸生ホタルの幼虫が出てくるのか、たいへん気がかりです。特に、陸生貝類を主食とし、それ以外のものは食べないカタモンミナミの幼虫は、どうなるのか・・・。

姿を見せないと云えば、多摩丘陵でも高尾山でもかれこれ5、6年も前から気になっている生物があります。特に気になるのは蛇とカエルです。30年以上前、私が現職の時代には、5月に子どもと野外観察に出かけると、谷戸の赤道でアオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシなどが、によろによろと這い出してきた、大騒ぎになりましたし、ときには、鳥の巣のひなを狙って落葉樹の幹をするすると登る蛇を観察することが出来ました。また、夕立の後などは赤道をのそのそと歩くヒキガエルをよく見かけました。

しかし最近では、よく山を歩く私でも、この1年間、蛇を見かけたのはヤマカガシを1匹だけで、ヒキガエルは一度も見かけませんでした。これはどう見ても異常です。

異常といえば、去年はこんなこともありました。夏に私の住んでいる住宅地の万葉公園（園内には万葉集の「赤駒を山野にはなち・・・」という短歌の歌碑があり、園名の由来となっています）で、アブラゼミが一度に100匹以上も大発生しました。セミの仲間のなかでもこの種だけの異変です。なぜここで起きたのか全く原因が判りません。

あとがき

・去年は年の初めに能登半島の大地震に見舞われ、その後も懸命な復旧作業が続いておりますが、夏の間は水害が起き、冬になっては豪雪と・・・、自然災害がつづいて息つく暇もありません。能登の会員の皆さん方、北日本・中国地方の日本海側の住民の皆様方の毎日が思いやられて、テレビの報道を見ていると胸が締め付けられる思いです。

それでも季節は回って春になります。梅のつぼみが膨らんできました。桃の節句が近づいてきます。皆さん方、もう少しの辛抱です。くれぐれもお体を大切に頑張ってください。

寄付・カンパのお知らせ

東京都青梅市在住の 和木 宏 様から 5,000 円のカンパをいただきました。

東京都 多摩市在住の土屋 学 様から 10,000 円のカンパをいただきました。

東京都八王子市 下由木地区環境市民会議様から 5,000 円のカンパをいただきました。有難うございました。カンパは、HPの維持費として大切に使用させていただきます。